
光の中に咲く花

タチバナ優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の中に咲く花

【Nコード】

N4624H

【作者名】

タチバナ優

【あらすじ】

つまらない日常にうんざりしていた高校生の最上怜と底抜けに明るい大学生の秋山由姫との恋愛物語。

1 - 1 : 出会い

僕はいつも思う、人は何故生きているのだろうか、こんなにも息苦しい世界で、かわりばえのない毎日を生きているのだろうか。そんな毎日をこんな事を考えながら生きてる自分は何なのか、いつも思う。

「……………い、……………れい、おい、怜!! 聞こえてるのか!!」

「ん、何? 全然聞いてなかった。」

「つたく、お前はいつもぼーつとしてるよな!!」

キーーン

「つつ!?! ……純、声大きい。小さな声でしゃべって。」

僕はあまりに大きな声に頭が痛くなってきた。

「俺の声は大きくない!!」

「……………ハア。もういい、で、さっき何話してたの。」

「だから、……………」

さつきから、大きな声を出しているこいつは、僕の親友で、山神純也だ。僕は純って呼んでる。そして僕は、最上怜。ここは、山条市にある、私立山条第三高校。総生徒数2543人の市内でもレベルの高い進学校だ。

「お前さつきから何独り言いつてんだ?」

「何でもない、気にしない、気にしない。それで、さっき何の話しをしてたんだ?」

「だから、今日これから遊びに行かないって話だよ!」

イスから乗り出しながら聞いてきた。

「別にいいけど、カラオケ?? ボーリング??」

「ふ、ふ、ふ。」

笑いながらカバンを開いて、純也が目の前に何かを突き付けた。

「??? 何これ。」

「見て分らないか、ライブのチケットだよ。」

「なんだよ、遊びに行くって言うから、期待してたのに、やっぱり行かない。」

イスから立ち上がって帰ろうとしたら、いきなり手を掴まれた。

「ちよつと待ってって、一緒に行こうぜ！！絶対楽しいから！！」

「何を根拠に言ってるの??」

純也は鼻息を荒くしながら、

「だって、クリムゾンアイのライブだぜ！！」

「クリムゾンアイ??何それ??」

「はぁ!?クリムゾンアイを知らないのか!?それでも人間か??」

ゴスツ!!

「いってゝ、何すんだよ!!」

「人のこと、人外呼ばわりしておいて、何言ってるんだ。分ったよ、行けばいいんだろ。」

「さすが、怜!!なんだかんだ言いながら、付き合ってくれるんだよな。」

僕はあまり乗り気じゃないが、行かざるおえなくなった。

1 - 2 (前書き)

投稿遅れました。これからまた、書き始めますのでよろしくお願
い
します。

どれだけ時間が経っても納得いかない、何故僕はここに居るんだろうか。こんな、人が多く五月蠅いところに。

僕たちは、今クリムゾンアイのライブを見に来ていた。

「おい、怜どうしたんだ、難しい顔して。何か考え事でもあるのか??」

こいつは・・・一度死んだ方が良いんじゃないか。

「はあく。別に何でもないよ。ただ、・・・」

「ただ何だよ、言いたいことあるならはっきり言えよ。」

「ただ、ここに来たことについて、納得出来ないだけ。」
「ほんとは何でここに来たんだろう。」

「今更何言ってるんだよ!!ここまで来たんだから、ぐちぐちゆうなよ。それにまだ、ライブ始まって無いだろ!!怜だつてライブ見れば気に入るから!!」確かにそうだ。まだ見てないから、分らないだけかもしれない。

「分ったよ、ちゃんとライブ見てから、文句言つよ。そういえば、クリムゾンアイってどんなグループなの??」

「・・・はあく。そういえば、お前クリムゾンアイ知らないんだつたな・・・分った。まず・・・。」

ジユンの説明によると、クリムゾンアイは、4人組の女性アーティストで、ボーカルのユキ、ベースのアイリ、とリン、ドラムのハルでみんな、大学生らしい。

「すごい詳しいなジユン。そこまでいくとキモいな。」「なっ!!こんな普通の普通だ!!キモくない!!」

「はいはい、僕が悪かったから、大声出さないで。それにしても、ジユンがここまで入れ込んでなんてびっくりだよ。」

「いや、まあ俺も最初はそんなに興味無かったんだけど、友達に連れられてライブを見に行つたんだ。そしたらなんとびっくり全員美

人なんだよ、それからだな、ハマったのは。」

「要するに、歌はそんなに上手くないけど、顔は良いと、だからハマったと、そういうこと??」

そういつた瞬間純也がいきなり手で口を押さえてきた。

「馬鹿!!あまりそういうこと言うな!!周りに聞かれたらただじやすまないぞ!!」

そういいながら純也は周りを見渡した。

「・・・ふう。よかった誰にも聞かれて無いな。ったくあんまり変なこと言うなよ、別に歌が下手なわけじゃない。逆に上手いよ。その上顔も良いから人気があるんだよ。」

「なるほどね〜。」

そんなどうでもいいことを話していると、司会者が出てきた。

「これよりクリームゾンアイのライブを始めます。それでは皆さんお願います。」

そしてライブが始まった。

ライブが始まり3曲が終わったところで、ボーカルの人が話し出した。

「みんな〜テンション上がってる〜!?!?」
「うおー！ー！ー！ー！！！」

周りにいる人たちがいきなり叫び始めた。

「なんだ!?! みんなどうしたの!?! ってジユンやも!?!?」

「何やってんだよ怜!?! お前も叫べよ!?! こうゆう時は叫ぶんだよ!?!」

「やだよ大声出すの苦手なんだよ。」

僕は苦手だから声をださなかった。すると、

「その真ん中の人〜テンション上がった? ? 暗い顔してるぞ〜。」

いきなりそんな声が聞こえた。僕は誰か分らなかったから周りを見渡した。

「その真ん中で周りを見渡した君!?! 君だよ!?!」

僕は自分を指差した。

「そっ君!?! 私達の歌嫌いかな? ? もしそうなら言って、曲変えるから!?!」

(えーと、どうすればいいんだ???)

僕は咄嗟に反応出来なかった。

「怜何してんだよ!?! 早く答えろよ!?!」

僕はジユンに言われてようやく気が付いた。

「べ、べつに嫌いじゃ無いです。ただ、感情を表に出すのが苦手なんです。というか、好きですよさっきの歌。」

そっいうと、彼女は、

「そっか、ありがとっ!?! この後も聞いてっってね!?!」
と花が咲いたように笑った。

「どうだったクリムゾンアイのライブは。来てよかっただろ??」

ライブが終わり、二人で帰っていたときに純也が聞いてきた。

「まあね。すっげーいい曲だった。」

僕がそう言つと

「だろ!!誘ったかいがあつたよ!!」

と純也は笑つた。

「ああ。また今度誘つてくれ。んじゃ、また明日な。」

「ああ!!んじゃな!!」

僕は純也と別れ家に帰つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4624h/>

光の中に咲く花

2010年11月4日14時03分発行